

飛耳長目

森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻62号 平成21年1月1日発行

「第二の夜明け」連載を終えて

一、「第二の夜明け」誕生の切っ掛け

場所は中国の奉天、時は零下20度の冬。空き家で凍餓死を覚悟、着の身着のままの三日目に去来した森信三先生の感懐はこうだった。

「自分の一生は最早これまでとしても、何ら悔いる処はないが、しかしここに連れてくる金森君の人生は、実はこれからであるのに、それをわたくしが、自分の運命に捲き込んで相済まない。それのみかわたくしは、できることなら同君を直接同君のご両親にまでお渡しすべき義務があるわけである。だがそのためには、自分も起きなければ金森君も起きはすまい。」

ところが不思議なことに、こう考えるときに、わたくしの生命の無限の底から二条の見えない光が射し込んで来たのである。それは、もし幸にして無事に祖国へ帰れたとしたら、自分の後半生の読書は、一半を内村鑑三先生の書物に、そして他の一半は、歴史書を読むことに当てたいと考えるようになったのである。しかも不思議なことには、内村鑑三先生の書物は、天師でのわたくしの教え子の佐々木正綱君が「全集」をもっていて、君の家を訪ねるごとに、玄関に並んでいたその「内村鑑三全集」を、いつも手にとって読みかけてみたが、何故かその文章がラフな感

じがして、三行とは読まずに書架へ返したものである。そしてそれは、戦前のわたくしが、キリスト教に關しては、隠者新井奥達先生に没頭していたからである。然るにそれが、今や凍餓死の覚悟から立ち上って、祖国に帰ろうと決心すると同時に。このような大きな転換が起きたのである。またもう一方の歴史書を読むということも、戦前哲学にのみ没頭していたわたくしにとっては、全く根本的な変化である。そしてこの瞬間における生命の根本的転換こそ、わたくしにとっては、今回の敗戦を境とする生命の回生的体験の根源だったといつてよいであろう。（森信三全集第25巻82頁）

二、命からがら舞鶴の地を踏まれて

「祖国に還りて」と題する森信三先生の歌

昭和21年6月8日引き揚げ民の一人として

舞鶴港に着す。

*戦ひに敗れし國か山河は旧（もと）のごと

くに美（うるわ）しけれど

*赤彦の死せりし歳にいのち生きてふたび

ぞ踏む皇國の土

*いにしへゆ卓（すぐれ）し人の若くして逝

ける多くを改めておもふ

*妻や子の生き死にさへも分かずしてわが身

ひとり還へり來にけり

*何事の為すべきかある五十路越えしいのち

を保（も）ちてここに帰りし

ここで再び「第二の夜明け」を復習したい。

三、「第二の夜明け」抄

* 明治維新は「日本の夜明け」であつた。しかし今回の「敗戦」を契機として、今現にその進行途上にある変革は、それにもまして巨いなる変革である。そはかつての明治維新の変革と同じく、わが民族にとつて「いのち」の巨いなる夜明けという意味を持つ。そは我々日本民族にとつて確かに、「第二の夜明け」と呼ばれるべきものであらう。

* 第一の夜明けの印としての明治維新は、外からの夜明けであつたが、第二の夜明けともいふべき今回の変革は、その本質において正しく「内からの夜明け」と称せられるべきものと思われる。

* 明治維新の変革も巨いなる変革ではあつた。それはその錯雑せる点においては、あるいは今回の変革以上であるかもしれない。しかもそこに成就せられたものは、内神武の操業への復歸に過ぎず、これを外にしては西洋文明の皮相的輸入に過ぎなかつた。なるほど明治の維新にも、国の生命の危機が感じられなかつたわけではない。しかしその危機は「天佑」をもつて辛うじてこれを乗り切ることができた。

* なによりもまず今回の変革が前者と異なる点は「敗戦」をその根本契機とするという点にある。明治維新の場合にも、国の危険が感じられなかつたのではない。しかしかにかくに危殆

に瀕したとはいへ危機を乗り越えたというところと戦い遂に破れて「無条件降伏」をしたということとは民族の生命の経験として全くその本質を異にするものと言わねばならぬ。これ今回の変革が前者と異なる根本的差異点であるとともに、また今回の変革をして「内からの夜明け」たらしめるゆえんでもある。

敗戦は現実的には一応民族の死を意味するに近い。その意味において明治維新は「死」を通過しての変革とは言い得ない。しかるに今回の変革は正しく民族の生命の「死」を通しての再生と言われるべきものである。これ今回の変革が敗戦という無限の悲痛を契機とするものでありつつ、なおかつ「新生」という呼称を以て呼ばれる所以であらう。

* しかるにこの「外なる物」への学びは十分に「内なる物」によつて裏づけられはしなかつた。成るほど我々は西洋の哲学倫理芸術等を輸入することによつて「内なる物」をも摂取し得たと考えていた。しかもそれがそうでなかつたことは今回の敗戦によつて、完膚なきまでに露呈せられたのである。否それはまったく悲痛感すらも破碎し終わる徹底性をもつものであつた。我々は今にして初めて「内なるもの」の裏付けなき単なる異なる「外なるもの」の移入の如何に愚かしきか悟つたのである。

* そこには我々の民族に特有な「浅薄さ」の

あつたことは、もとより言うまでもないが、同時にそこにはそれらのみに留まらないより深い根源のあることを知らねばならない。そうしてそれは我々の民族がその生活環境としての島国的限定の歴史的所産としての「素朴なる単純性」さらには「素朴なる無知」に根ざす「独善主義」である。私はこの二つの言葉を無意識に用いているのではない。それは私が自身の今日までの歩みを反省することによつて自らの姿の上に見いだした痛ましき根本性格であるとともに、また程度の差は無量であるとしても、極めて少数の例外を除いては、国民の大部分がそれより免れ得ない民族の宿命的制約と思われる。

* すなわち我々が明治の変革によつて、眼を「外に」開き、西洋文明のうち物の面に着目して、これが移入に奔命しつつも、それを裏付ける「内なる物」を閑却し否これを拒否したのは、それが我々の世界観人生観の主本をなすものを否定崩壊せしめんことを虞れたが故にほかならない。これは敗戦後の今日にしてみれば実に嗤うべき迂愚の沙汰といふべきである。しかも当時にあつてはそれは正しく民族の「いのち」の本能的危機感であつたと言わなければならぬ。

* まことにそれは今日よりして顧みれば実に嗤うべき迂愚の沙汰である。否嗤うにも堪えない悲惨なる痴愚というほかなきものである。

しかも当時の時代にあつては、必ずしもこれを単なる痴愚の見とのみ言うことのできない点があつた。すなわちそれは先にも述べたように生命の展開の縦の系列を主本とする民族の生命が、自己とまつたくその質を異にする生命展開の横の側面に着目しその基盤面を重視する彼れの世界観人生観に対して、いわば本能的なる危惧感を抱けるが故であつた。我々はこの種の本能的危惧感の先蹤をかの家元の手によつて行われた鎖国政策において見ることが出来る。

まことに世界史上いかなる国がかかる「痴愚」を敢えてした国と民族とがあるであろうか。しかもこの「痴愚」は単なる「痴愚」ではなくして正に「宿命的痴愚」であり、さらに厳密には結局宿命そのものと言ふのほかないであろう。けだし宿命とは、その生命にとつての絶対的制約であつて、これを外より如何ともすべからざるものであり、これが脱却は只々時の歩みに即するみずからの「いのち」の展開に俟つのはかないものだからである。

*しかるに今やその「期」は至つたのである。しかもそれは遺憾ながら我々自身の純粹な自覚によるものとは言ひ得ないのである。けだしそれはわが民族の絶対自発に出づるものでなくて、敗戦という絶大なる悲劇を通してわれに課せられたものに依るのだからである。

まことに我々の今回の変革は敗戦という悲劇によつて、我に課せられたるものを契機として遂行せられつつある。ここに於いて我々にとつて最も重大な点は、この巨大なる変革を他によつて行われると考えるか、はたまた自らによつて行ふと考えるかの相違にある。これを他によつて行われると考えるとき、今回の変革はそれが巨大にして、深刻徹底を極めるだけに、それは正しく「亡国」というのほかないであろう。これに反して、これを自ら行うものとするとき、この巨大なる変革は、その無比の徹到底の故に正しく「新生」の名に値するであろう。

*そこに許されている可能はただこれを現実的事実のままにこれを絶対的他律として受容するか、はたまたこれを自らの絶対自律に転換してこれに対処するかにある。而してそのいずれをとるか、一見全く我々の自由であるかに考えられるが、しかも前者をとる場合には、それは必然詳しくは、余儀なしとする必然であつて、ただ後者をとる場合のみが我らにおける真の自由なのである。しかもこの自由は、絶対他律を絶対自律として観ずる心の転回を要とし而してかかる心の転回は只我執の否定……この場合には単なる個人我の否定でなくして民族我の我執の否定……を必然として予想する。

*我々にとつて「第一の夜明け」であつた明治維新には、我々の民族は断じてかくの如き悲痛にしてかつ深刻なる生命体験をしなかつた。けだしそれは単に「外に向う夜明け」であつたからである。しかるにこの度の変革はそれとは全くその質を異にする。それは前述のように、我に課せられた絶対他律を自らの絶対自律として転換することによつてのみその意義の果たされるものであるが、しかしそれは無限なる痛苦の伴うを必然とする。戦いに敗れたそのことがまず無限の悲痛事である。しかし我らの悲痛は、ひとりそのみに留まらない。我らには敗戦の結果としてさらに幾多の自発ならざる条件が課せられつつあるのである。しかも我らの悲痛は尚これに留まらないで、この課せられたる絶対的他律を絶対自律とすべき絶大なる悲痛が残されている。しかも我々にしてよくこの悲痛の限界を打ち超え得たならば、我らはそこに真実の歓喜を味わうことができるであろう。傍線は編集者

（「開頭」創刊号昭和22年2月号から）
次の記事も再掲する。

四、「微言」の再掲(抄)

○もし原子爆弾によつて局が結ばれるでなかつたら今回の敗戦ほど悲惨な敗戦は世界史上全く類例がないであらう。

○日本が原子爆弾によつて手を挙げたといふことは一見最も悲惨なるが如くに見えつつ

実は最も幸せなことだったのである。この一事が通身徹骨体得できぬ間はわが国の新生を語る資格はない。

○佛教では「恩讐の彼方に」と教へ基督教では「汝の敵を愛せよ」といふ。嗚呼、如何なる民族が古來この真理を実践したといへるであらうか。

○今日われら同族の間に所謂復讐心の無いことはわれながら驚くほどである。われわれはこの原因を徹底的に究明しなければならぬ。それが分つた時初めて日本の新生を語りうるであらう。

○戦いに敗れて初めて知り得た真理：地上にこれほど貴重な収穫がまたとあるであろうか。

○得る者は失ひ失ふ者は得る。ここに偉大なる神の「平衡」がある。これをコンコルドの聖者は「報償」の理と唱へた。

○「恩讐の彼方に」といふ真理と「汝の敵を愛せよ」といふ真理と。この二つの大いなる真理が真に合一する時初めて地上に真の永遠の平和はもたらされるであらう。

○敗戦によつてわれらの学んだ真理の如何に豊富にして無限なことか。なせもつと多くの人々がこの無限の真理を表現しないのであらう。

○私には今後尚相当の期間の教訓を噛みしめるだけで精一杯のやうである。否うつかり

すると私の一生はそれだけで終わるかも知れない。

○個人的回心にあつてきへその身證せる教訓は無限であつて終生尽きる期はない。況や民族的回心ともいふべきわれらの「新生」においておやである。

○私には終戦後ほど神の存在を確信したことは嘗てない。

○終戦直後から今日この時に至るまで私の上に生起した一切の出来事は一つとして私にとつて絶対必然的意義をもたぬものはない。

「恩寵」といふのはかかる体験的認識の宗教的表現なのであらう。「開頭」20号昭和23年3月号）傍線は編集者

五、まとめ

森信三先生のおことばに「絶対不可避なることは即絶対必然にして、これを神の「天意」と心得べし（一日一言）一月五日」というのがある。この言葉はここでは極めて重く響く。

しばしば愚生が述べてきたように、これは森信三先生の最善観の極みである、というのが愚生の結論である。先生は従容として「被爆」を受容すべし、とお考えになつたかと思う。

現に今、日本は米国に対し原爆の投下の責任論を振りかざし、執拗にその補償等を求めてはいないし、国民感情も嘗ての「敵」であつたという考えは消え失せているかに見える。加えて政府は、日本のみが世界の「侵略国」の代表というかのよな認定（村山談話）を敢えて自ら認

め、それを踏襲するという愚を続けている。こう書けば、愚生にとつてはこの最善観ないし神の恩寵という考え方に全面的に納得する人ではないのである。

森信三先生は引き揚げ直後、内村鑑三全集を借りて読まれた。その後その全集を新たに購入された。その時の感懐は満州の地に置いてきた全蔵書よりも価値のあるものを手に入れた思いだと述べられている。いかに内村鑑三に親炙されたかが解ると言えよう。（二一繁）

「修身教授録探求」は次号から再開します。

T63310003

桜井市朝倉台東二丁目五三二八一九

臂 繁 一一 発行

TEL・FAX 074414513422

Email: hji@ken.jp

http://web1.ken.jp/syushin/

第70回「かよう会」のご案内

日時 平成21年1月20日（火）
18時30分～（毎月第三火曜日原則）

場所 四ツ橋ビル地下1階『会議室』
「電話」（四ツ橋ビル 管理事務所）
06-6531-3686

交通 地下鉄：四ツ橋線四ツ橋下車
2番出口へ。歩30秒
「長堀鶴見緑線」並びに「御堂筋線」
心斎橋駅及び「クリスタル長堀」との
連絡口で直結。

テキスト 森信三著「修身教授録」（致知出版）
2300円（大きな書店で購入）
1/20 ねばり
2/17 批評的態度というもの
3/17 一日の意味

参加費 1000円